Catalog 18-#5

www.tambourine-japan.com
email: song@tambourine-japan.com

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。
プライス･コード{ａ￥１６９０/Ａ￥１８９０/Ｂ￥２０９０/Ｃ￥２２５０/Ｄ￥２４９０}
（表示価格は税抜き）　別途消費税が加算されます

（送料）
※ご注文枚数に関係なく《一律２５０円》郵送
※代金引換送料（郵送）：初回 390 円/二回目以降 590 円何枚でも）

注文方法サイト：　http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm

【ご注文はできるだけ１１/７までにお願いします】
注文方法１の場合を除き、発送はご注文受取り後約５日以内にしたいと思っていますが、無理な場合もあります。締切日に近いご注文の場合は、２週間ほどかかる場合もあります。電話注文はお受けしておりません。
●お問合せはメールにてお願いします。
●ご注文の際、プライス又はプライス･コードをお書き願います。
●カタログは郵便にてお届けします。

（秋の夜長の･･･女性シンガー）
*暑い夏が続いて、突然秋がやって来ましたね。今回はやや偏りがあって、女性の SSW(Singer&Songwriter)を含めて、スコットランドやフィンランドなど、女性シンガーのＣＤがかなり充実しています。秋の夜長に麗しき女性シンガー達の唄をお楽しみ下さい。
*今回も温故知新！何枚か旧譜の再紹介をしました。新たな発見や感動があって、楽しくコメントを書くことができています。しばらくは「最近入荷＋旧譜再紹介」中心のカタログをお届けしたいと思っています。

（前回カタログの訂正）
*フランダースの Naragonia Quartet の新作をノルウエーで販売していました。

（分割払い）
*分割払いをご希望の方はお申し出下さい。最初のお支払いは請求額の半額になります。残り半額は 12 月 15 日まででＯＫです。

＊TOP　30　SELLERS(18－#4)＊
1)JACKIE OATES:The Joy Of Living(England)
2)CLANNAD:Turas 1980(Ireland)
3)KATHLEEN LOUGHNANE

:Patrick O Neill's Manuscript(Ireland)
4)THE WEIGHT BAND:World Gone Mad(USA)
5)TANNAHILL WEAVERS:Orach(Scotland)
6)KEVIN BURKE:An Evening With Kevin Burke(Ireland)
7)THE HIGH SEAS:The High Seas(Ireland)
8)DAIMH:The Rough Bounds(Scotland)
9)MIKE MCGOLDRICK & DEZI DONNELLY
:Dog In The Fog(Ireland)
10)MOUNTAIN HEART:Soul Searching(USA)
11)STEVE TILSTON:Distant Days(UK)
12)FAIRPORT CONVENTION & FRIENDS:A Tree With Roots
～And The Songs Of Bob Dylan(England)
13)ELENA LEDDA:Lantias(Sardinia)
14)SUDAN DUDAN:Heimen Der Ute(Norway)
15)LEVI PARHAM:It's All Good(USA)
16)KENNEDYS:Safe Until Tomorrow(USA)
17)MADDY PRIOR WITH HANNAH JAMES & GILES LEWIN
:Shortwinger(England)
18)RACHAEL McSHANE & THE CARTOGRAPHERS
:When All Is Still(England)
19)JOE ELY:The Lubbock Tapes - Full Circle(USA)
20)CALAN:Deg - 10(Wales)
21)ANTON MacGABHANN & CAITLIN Nic GABHANN
:Tobar Bhride(Ireland)
22)HADLEY McCALL THACKSTON:Hadley McCall Thackston(USA)
23)KAREN JONAS:Butter(USA)
24)MILLADOIRO:Atlantico(Galicia)
25)HO-RO:Hex(Scotland)
26)JUDY DYBLE:Earth Is Sleeping(England)
27)JENNIFER WARNES:Another Time,Another Place(USA)
28)MARTHA FIELDS:Dancing Shadows(USA)
29)THERESE McINERNEY:Down The Strand(Ireland)
30)NARAGONIA QUARTET:Mira(Flanders)

Re-issue, USA, Canada, British Folk, England, Scotland,Ireland,

USA(Trad),Canada(Trad), Europe ほか, あとがき

[リイシュー/Historic Recording]
(LP/ＢＲＩＴＩＳＨ　ＦＯＬＫ)
*BERT JANSCH:Moonshine ¥2890
(名盤中の名盤。LP 盤。1973 年作。1973 年/2015 作。Earth)
*BERT JANSCH:L.A. Turnaround ¥3090

(名盤中の名盤。1000 枚限定カラー{青}LP 盤。アルバム未収録曲４曲を追加収録したダウンロード･コード付。1974 年作。1974 年/2018 作。Earth)

(CD/ＢＲＩＴＡＩＮ＆ＩＲＥＬＡＮＤ他)

*DAVE WAITE & MARIANNE SEGAL:Paper Flowers A
(英国のフォーク･ロック･バンドの Jade の Dave Waite と Marianne Segal が Jade 結成以前にデュオで活動していた時代の 1967～1970 年の未発表音源から 22 曲を収録した編集盤。70 年代前後の米国のピュアな女性フォーク･シンガーの趣があって、その若草の香りの Marianne のヴォーカルと Marianne & Dave のヴォーカル･デュエットが新鮮。この時代、英国の若いフォーク･シンガーもミュージシャンも、米国音楽への憧れて音楽活動をしてましたよね。その真っ直ぐさと、ほのかに香る英国風香りが気持ち良い。2004 作。Lighting Tree)

*THE LYLE McGUINNESS BAND:Elise,Elise B
(Graham Lyle,Tom McGuinness,Hughie Flint,Alan Dunn,Chrissie Stewart の Lyle McGuinness Band の 1983 年の"Acting On Impulse"から 12 曲にシングル盤収録の"What Does It Take"と未発表音源曲二曲を加えた 15 曲収録。いつ聴いても幸せ気分なゆるくて何とも愛おしい二流センスの英国ロック。ゲスト:モイア･ブレナン{クラナド}。1997 作。Diamond Recordings)

*RAB NOAKES:Bridging the Gaps D
(二枚組。一枚目は 1972 年の"Rab Noakes"全収録曲＋ボーナストラック２曲と 1978 年の"Restless"の LP の A 面全収録曲の計 19 曲で、二枚目は"Restless"の LP の B 面全収録曲＋ボーナストラック２曲と 1980 年の"Rab Noakes"全収録曲＋ボーナストラック１曲の計 18 曲。本作の聞き物は 1972 年の彼の一作目"Rab Noakes"。Rab の音楽仲間等{ゲスト:Archie Fisher,Gerry Rafferty}とロンドンで収録された"Rab Noakes"は、初期 Lindisfarne に通じるフォークロックが快い名盤。2018 作。Neon)

*RAB NOAKES:The River Sessions C
(1982 年のギター弾き語りライヴ集。Lindisfarne の演唱で馴染みのある"Together Forever"ほか自作曲 11 曲。SSW としての彼本来の唄の魅力が味わえる。2003 作。River)

*SALLY'S FRIENDS:Boys Of The Town A
(アイリッシュ系フォーク･デュオの Sally's Friend～Chris Ward {ヴォーカル､ギター}と Pete Onions{ヴォーカル､マンドリン､ギター}の 79 年作。Chris&Pete のシンギングは 70 年代ブリティッシュ･フォークの香りが高く、きりっとして温か。Kissing Spell)

*STONE ANGEL:East Of The Sun A
(ブリティッシュ･フォーク･ロックの名盤。2001 作。Kissing Spell)

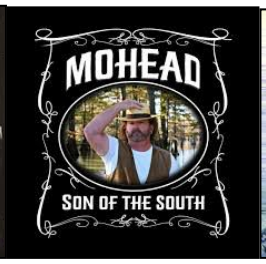
*STONE ANGEL:Lonely Waters A
(ブリティッシュ･フォーク･ロックの名盤。。2004 作。Kissing Spell)

*BERT JANSCH:The River Sessions ¥1000

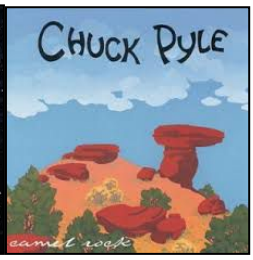
(新品商品ですが、ジャケット左上に７～８ミリの切れ目が入って
います。製造時の事故と思われます。2004 作。River)

[CD/ＵＳＡ]









(Donnie Fritts)　(JMohead)　(Goodnight Moonshine)　(Chuck Pyle{旧譜})

*DONNIE FRITTS:June - A Tribute To Arthur Alexander　A
(Donnie Fritts がソウル･ミュージックの草分け的歌手の Arthur
Alexander, jr と出逢ったのは、D.Fritts が 16 歳で Arthur が 18 歳。
以来二人は親しくなって、D.Fritts は Arthur を June{Junior から
採った愛称}と呼んだという。本作はその亡き"June"に捧げたア
ルバムで、一曲目の"June"は"June"が亡くなった寂しさを素直
に表現した D.Fritts 節の真骨頂とも言える感動曲。録音はマッ
スル･ショールズ。昔馴染みのミュージシャンは David Hood のみ
になったが、D.Fritts は安定感のある南部フィーリングな音に
どっぷりひたって、あの世の友に届くように心を込めて声を振り
絞る。D,Fritts 流のゴスペルに聞こえた。涙無しには聴けない名
盤。2018 作。Single Lock)
*MOHEAD:Son Of The South　A
(メンフィス生まれの南部ロッカー＆SSW＆ギタリストによる、
"Son Of The South"というアルバム･タイトルに偽りなしの嘘み
たいに南部ロックな SSW アルバム。自身が弾くエレキ＆スライド
ギターにドラムス、ベース、オルガン、フィドル、女性バックグラ
ウンド･ヴォーカルによる体に美味しい南部ロック･サウンド、
そして本作の主役の Mohead の Van Morrison や Greg Allman をホー
フツさせるヴォーカルは、南部ロックの旨みをばっちり体現して
いて、その本醸造な旨みに耳を疑うほど。Mohead のロックは、ど
っしりとしている分、その旨みが濃い。ネットで調べたら、Bob
Dylan や Little Feat や Ray Wylie Hubbard などと共演したり、同
じステージに立ったことがあるとか。2018 作。Rogue/Continental)
*GOODNIGHT MOONSHINE:
:I'm The Only One Who Will Tell You, You've Bad　A
(Goodnight Moonshine はテキサスを拠点に活動する女性 SSW の
Molly Venter とシンガーでエレキギター奏者の Eben Pariser の
夫婦デュオ。Molly はフォークコンテストで優勝経験のある実力
派。夫妻の音楽上の役割は Kennedys と似て、夫の Eben はエレキギ
ター＆ハーモニー･ヴォーカルで奥様の Molly の唄の魅力を引き
立たせる役。Kenndeys との違いは、彩る音楽が汎アメリカン･ロッ
クなテイスト。ドラムス、ベース、バンジョー、スティールギター、
オルガンなどの音を加えて彩ったロックは、自由な空気感があっ

て、Eben は水を得た魚のように伸び伸びとキュートにうたう。甘み感のある彼女の唄は西海岸の女性 SSW に通じる。2018 作。Keep The Spark)

*CHUCK PYLE:Camel Rock A

(コロラドを拠点に活動をしていた SSW の Chuck Pyle{2015 年没}の 1995 年の Gordon Burt のフィドルをお伴にしたギター弾き語りライヴ。Chuck Pyle の唄は Jerry Jeff Walker や John Denver や Gary P.Nunn や Nitty Gritty Dirt Band などが取り上げているが、久しぶりに聴く Chuck の唄に心和みっぱなし。コロラドの大自然の生活の中から生まれた心優しい唄が次から次。ラストは J.J.Walker が"Ridin' High"{1975 作}に収録した Chuck 作"Jaded Lover"{7 分 33 秒}で幕。全 13 曲心ほっこり。。昔の親友に出逢った気分。在庫期間が長い CD ですので、検盤をしてお送りします。1995 年。Bee'N'Flower Music)

*THE V-ROYS:All About Town A

(ナッシュビルの四人組ルーツロック・バンド"The V-Roys"の 1998 年リリースの二枚目。Twangtrust{Steve Earle & Ray Kennedy}がプロデュースを手がけた本作は、ブルーグラス、カントリー、フォーク、ロック、パンク等を凝縮して、ビートルズ風に仕上げた風の音楽的にメチャ魅力的なアルバム。在庫期間が長い CD ですので、検盤をしてお送りします。在庫数僅か。1998 年。E-Squared)

*ARTHUR DODGE AND THE HORSEFEATHERS:Nervous Habit A

(初期 Crazy Horse や初期 Byrds の影響を受けたという Arthur Dodge と彼のバンドによる 2000 年のアルバム。Randy Newman を思い起こさせる Arthur Dodge のしたたかさを秘めたしゃがれ声と彼のバンドのやや粗めでどっしり感のあるルーツロックは、百戦錬磨の手応えと味わいがあってメチャ最高。一度だけカタログに載せて、その後、載せ忘れていた CD。2000 作。Blue Rose)

*WILL STEWART:County Seat A

(ソロ名義のアルバムだが、カントリー・ロック・スタイルの音楽。SSW でヴォーカルでギタリストの Will Stewart の本作は、彼の故郷アラバマに帰郷したときにアルバムのアイデアが浮かんだという。エレキギター、スティールギター、バンジョー、ドラムス、ベースそれに女性シンガー Janet Simpson とのデュエットなど、美味しすぎる輝き感のあるカントリー・ロックに惚れ惚れ。Will のヴォーカルはやや Dylan ぽくもあるが、Larry Murray のような Sweet Country な甘み感があって、後ろ髪引かれる魅力がある。スティールギターをフィーチャーした大好きな「音」に夢見気分。2018 作。Cornelius Chapel)

*JEFFREY MARTIN:Dogs In The Daylight(Expanded Edition) A

(三枚目"One Go Around"で初体験し、惚れ込んでしまった SSW の Jeffrey Martin の 2014 年作の CD にボーナス・トラック 4 曲を加えて"Expanded Edition 版"として新に発売された 19 曲収録 CD。ドラムス、ベース、ピアノ他による伴奏だが、基本的にギターの弾き語りを中心にした Jeffrey の唄は、三枚目で惚れ込んだ唄そのままに渋くて味わい深く、言葉を噛みしめるようにうたう Jeffrey の

唄は最高潮。何と言うか、やはり 70 年代の米国 SSW/フォークの、それもコアな匂いを発する雰囲気ある唄は彼独特な味わいがあって、聴き惚れてばかり。本作も Bob Martin クラスの渋々で Great な SSW アルバム。ゲスト:Anna Tivel。2014 年/2018 作。Fluff And Gravy)

*JEFFREY MARTIN:One Go Around A
(三枚目。2017 作。Fluff And Gravy)

*CHIP TAYLOR AKA JAMES WESLEY VOIGHT:Fix Your Words A
(ジャケット写真は Chip Taylor が子どもの頃の家族写真。左端が Chip で右端が母親の Barbara。Side A"Fix Your Words"、Side B "When I Was A Kid"と分けられた本作は、これまでの Chip Taylor のどのアルバムより声が年老いた風で、祈りや哀しみや懐かしむ気持ちが込められていて、唄が心にしみわたる。元々語りかけるように悠々と自作の唄をうたう Chip だが、彼の持ち味をさらに煎じ詰めた味わいを極めていて、感動の深さが深い。現時点で 2018 年の SSW アルバムのベスト。2018 作。Train Wreck)

*GEORGE ENSLE:Build A Bridge A
(Townes Van Zandt が「George Ensle は最も影響力のある尊敬すべき SSW の一人」と賞賛するテキサスの SSW の George の唄 2008 年作。どことなく Jerry Jeff Walker 風なのだが、Bill Staines 風でもあって、精神が自由というか飄々としていて、唄に爽やかさが感じられる。2008 作。Berkalin)

*ERIC TAYLOR:The Kerrville Tapes A
(Kerrville Folk Fes でのライヴからの全 10 曲。全曲鮮やかなアコースティック・ギターの弾きで、Eric ならではの情景描写が見事な心痺れる叙情的な唄の数々。絶品。2003 作。Silverwolf)

*THE NORMAN FISHINTACKLE CHOIR
:One Kind Of Bait In The Bucket A
(72 年作"Out The Window"と 73 年作"Shimmy She Roll,Shimmy She Shake"の Jim Pulte のバンドの 2007 年作。Windstorm)

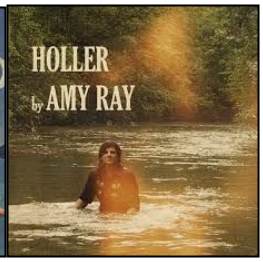
[CD/ＵＳＡ{female}]



(Maria Muldaur)



(Eliza Gilkyson)



(Amy Ray)

*MARIA MULDAUR:Don't You Feel My Leg B
(耳と目を疑う発売時 75 歳の Maria の新作だ。1973 年リリースの Maria の一枚目のソロ・アルバム制作時に Dr.John が推薦した曲が Blue Lu Baker というニューオーリンズの女性ブルース・シンガーの曲。本作は Blue Lu Baker や彼女の夫の Danny が作詞作曲した曲を中心にニューオーリンズで収録されたオールド・スタ

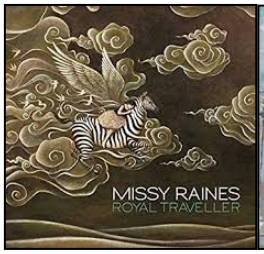
イルのニューオーリンズのブルース色濃厚なアルバムで、Dr.John こそいないが、"Maria with Dr.John"スタイルを基本にMaria は若い頃と同じようにノスタルジックな妖艶さを発散していて、凄い。二枚目の"Waitress In A Donut Shop"の表ジャケのように髪に花飾りを付けた Maria の見た目は 40～50 歳代のセクシーなオバサン。Maria 自身のヴォーカルも魅力的だが、ニューオーリンズ･スタイルの音楽も充実。2018 作。The Last Music)

*ELIZA GILKYSON:Secularia A

(Compass 傘下に入った Red House からの Eliza Gilkyson の新譜で通算 20 枚目。オースティンの敏腕ミュージシャン達のバックアップのもと制作された Eliza の本作は、昨今の彼女のアルバムでは、最もフォーク寄りの音楽。彼女の祖母の詩をもとにした曲や父親との共作を含み、またゴスペル･シンガーの Sam Butler のバックアップ･ヴォーカルなど、Eliza 本人のルーツの音楽に立ち返り、寄り添うようにうたった渾身のアルバム。特にゴスペルな唱法ではないが、ゴスペルやスピリチュアルの心が感じられる、ゆったりした大河の流れのようなどっしりした SSW アルバムだ。音楽は伝統フォークからルーツロックまで幅が広いが、音楽に不思議な広がり感が感じられて、夢を見ているような感じがする。名作。2018 作。Red House)

*AMY RAY:Holler A

(Indigo Girls の片割れで SSW の Amy Ray のソロ。自身「伝統的カントリー、南部ロック、マウンテン･ミュージック、ゴスペル、ブルーグラスにインスパイヤーされたアルバム」と言っているが、その言葉通り、アメリカン･ルーツミュージックとして、そのルーツの味わいをしっかりとキープしつつ、上記の音楽性の幅で、人生の悲喜こもごもや社会の不条理をゴスペルをうたうように魂を込めて唄にしてうたう。Compass レコードの力か、Compass の共同創設者 Alison Brown 他バックアップするミュージシャンの演奏が幅広く奥深く充実していて、唄とともにサウンドも味わいが深い。感動作。2018 作。Compass)







(Missy Raines) (Kathy Mattea) (Amy Helm)

*MISSY RAINES:Royal Traveller A

(ベース奏者として"International Bluegrass Music Awards"という賞を７回も受賞しているという Missy Raines は SSW としても凄く魅力的で、主に女性のゲスト･シンガーとの爽やかなデュエットやハーモニーは、心軽やかな気分になる。バックの音楽はオシャレなというかハイセンスなブルーグラスで、古っぽい土臭さも感じさせつつ、爽やかで勢いがあって、滅茶苦茶清々しい。

プロデューサーのAlison Brownの手腕も見事で、SSWアルバムとして唄も音楽も鮮度が高い。嘘みたいに気持ちのよいブルーグラス系女性SSWアルバムだ。w.Tim O’Brien,Claire Lynch,Amy Ray,Sierra Hull,Stuart Duncan,Dan Dugmore,Matt Flinner,Todd Phillips,Kenny Malone,Molly Tuttle,etc. 2018作。Compass)

*KATHY MATTEA:Pretty Bird A

(二度のグラミー賞受賞のヴェテラン女性シンガーのKathy Matteaの新作で通算15枚目。Jesse Winchesterの"Little Glass Of Wine"やトラッドの名曲"She Moves Through The Fair"{SheをHeに置き換えている}やDougie MacLeanの"This Love Will Carry"{D.MacLeanがハーモニー・ヴォーカル}等などのSSW/フォーク系の美味しすぎる名曲の数々を魂を込めてじっくりとうたっている上に、プロデューサーのTim O'Brienは、もうばっちりの包容力あるフォーク～ルーツロック・サウンドを施しているのだから、悪かろう筈がない。ソファーに深々と座ってお聴き下さい。w.Dan Dugmore,Dennis Crouch,Charlie McCoy,Jim Brock,Bill Cooley,etc. 全12曲。2018作。Captain Potato)

*AMY HELM:This Two Small Light B

(元Ollabelleのヴォーカルで、Levon Helm・Libby Titus夫妻の娘Amyの三年振りの新作でソロ二枚目。プロデューサーのJoe Henryは、Joe自身の豊かな音楽経験を通じて得たひらめきを発揮して、両親譲りのAmyの豊かな歌唱力をたっぷりと引き出すゴスペル風アメリカン・ルーツロック志向のSSWアルバムを完成させている。Allen Toussaintの"Freedom For The Stallion"やRod Stewartの"Every Picture Tells A Story"収録の"Mandolin Wind"やLevon And The Hawks時代の曲でRobbie Robertson作の"The Stones I Throw"等原曲の味わいをほのかに残しながら、Amyの唄は根を張った大木のように揺るぎがない。2018作。Yep Roc)

*OLLABELLE:Riverside Battle Songs A

(Produced by Larry Campbell with Ollabelle。2006作。Verve Forecast)

*MARTHA FIELDS:Dancing Shadows A

(南部魂というか、ヴォーカルにもフォーク、ブルース、カントリー、ブルーグラスごった煮のロックにも南部フィーリングがみなぎるMartha Fieldの新作。Marthaと彼女のバンドが体現したロックは、オール・アメリカンな音楽がそこかしこに感じられて、ダウン・トゥ・アースで、何よりポジティヴ。彼女のヴォーカルの基礎的な部分で、アパラチア民謡や古いカントリーの匂いが感じられるのも、彼女のヴォーカルの大きな魅力になっている。バックで気概あるロックを叩き出す強者達は、Manu Bertrand,Serge Samyn,Urbain Lambert,Olivier Leclerc,Denis Bielsa。2018作。Martha Fields)

*SERA CAHOONE:The Flora String Sessions a

(女性SSWのSera Cahooneの100%新鮮野菜な美味しいアルバム。初

めて知ったSSWだが、ギターやヴァイオリンやチェロの気持ちの良いアコースティック・サウンドの流れに乗って聞こえてくるSeraの耳元でささやくような唄の何と心地よいこと！Seraの唄はどの唄もリラックスしていて、自然体で、その響きは何か懐かしさを覚える響き。たった７曲のみの唄だが、むしろその少なさが逆に一曲一曲の味わいが深く感じられるような気がする。SSWは誰もがホロリの逸品。2018作。Galaxy Dog Music）

*FRED JAMES & MARY-ANN BRANDON:We Belong Together　　a

（ヴェテランSSWでギタリストのFred Jamesとスワンプ女王のMary-Annの共演盤。Mary-Ann豊潤なヴォーカルで聴き手を圧倒する。2011作。SPV）

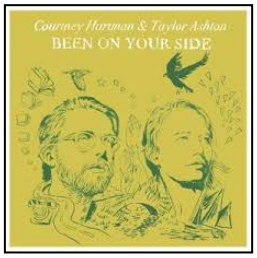
*WENDY BECKERMAN:Mango Moon　　a

（Jack Hardy周辺のミュージシャンがバックを固めた女性SSWのWendy Beckermanの1996年作。唄の自由さと彩りのある素敵な女性SSWアルバム。1996年作。Brambus。製造年が古いので検品をしてお送りします）

*CATHRYN CRAIG & BRIAN WILLOUGHBY:Real World　　a

（ナッシュビルのの女性SSWのC.Craigとブリティッシュ・フォークグループのStrawbsのBrian Willoughbyのデュオ・アルバム。Brianのブリティッシュ・フォーク・ギターとCathrynのメルヘン調の穏やかな唄とが何とも心地よい。ずっと聴いていたい気分。2013作。Cabritunes）

[CD/ＣＡＮＡＤＡ]



（Courtney&Taylor）

*COURTNEY HARTMAN & TAYLOR ASHTON

:Been On Your Side　　A

（ブルーグラス界では有名らしい女性グループの"Della Mae"のSSWでギター奏者のCourtney Hartmanとカナダ人SSWでギター＆バンジョー奏者の二人組による新作。Free Dirtからのリリースということで、オールドタイムなルーツミュージックを期待して聴き始めた本作。確かに表面上はそんなタイプの音楽だが、音楽の内側は悲哀感や寂寥感のようなものがそこはかとなく漂っていて、しかもサウンドは古色感があるものの、音楽センスは絶妙で、アメリカン・ルーツ系の男女のヴォーカル・デュオ・アルバムとして、独創性と熟成度が高い。12曲中10曲が二人の自作曲だが、５曲目に収録されたNick Drake作の"Which Will"などは、オリジナルの夢うつつ感が彼らなりの手法で見事に表現していて、心遊ばされる。二人のリラックスしつつ、阿吽のヴォーカル・ハ

ーモニーが何とも言えず素晴らしく、心惹かれて仕方がない。二人のギターとバンジョーも細心の演奏が光っている。Taylor のヴォーカルは John Gorka っぽい。宝物。2018 作。Free Dirt)

［CD/ＵＫ，ＩＲＥＬＡＮＤ］





(Kitty MacFarlane)　　(Fairytale)

*KITTY MacFARLANE:Namer Of Clouds　　C

(英国南西部サマセット出身の若き歌姫のフル･アルバムとしてのデビュー CD。2016 年に EP を発表。Kitty の SSW としてのセンスやギターのセンス、トラッドなどの選曲のセンスは、ブリティッシュ･フォークの持つ気品や抒情や繊細さや孤高感などに敏感なセンスで、持ち前のか細く美しいヴォーカルで、見事に一輪の凛とした美しい花を咲かせている。録音は携帯用録音機によるフィールド･レコーディングで、唄に相応しい場所で録音したという。唄の眼差しが心なしか遠くに感じられるのと、唄の表情にフレッシュな空気感が感じられるのは、そのせいだろう。その音源の上に、総勢７名のミュージシャンが Kitty の唄の世界に相応しい音でキリッと彩りを加えている。英国フォークの未来は明るい。2018 作。Navigator)

*FAIRYTALE:Autumn's Crown　　C

(Fairytale は Laura Isabel Biastoch 嬢の真珠の輝き？の妖精ヴォイスと Laura & Berit Coenders の女性ヴォーカル･ハーモニーをフィーチャーしたドイツのケルティック･フォーク･ロック･バンド。ぼくの耳には、70 年代の幽玄ブリティッシュ･フォークの延長線上のケルティック風味の夢想フォーク。音楽のみならず、ミュージシャン達の飾り付けや衣装、パッケージやブックレットのデザインまで徹底して"Fairytale"な世界。楽器編成は、ヴァイオリン、ヴィオラ、ギター、ブズーキ、ドラムス、ベース、チェロ。出来過ぎ。2018 作。Magic Mile Music)

*RAY AUSTIN & FRIENDS:A Piece Of Heaven　　B

(1943 年英国ヨークシャー生まれで 1970 年にドイツに移り住み、フォーク&ブルース･クラブの経営をし、SSW としても活動してきた Ray Austin 翁と仲間達による本作は、1970 年代 SSW ファンにとって、終始夢見心地な音楽。Ralph McTell の"Street Of London", Bert Jansch の"Needle Of Death"や John Prine の名曲三曲等など、SSW ファン泣かせの曲を仲間達とゆるく懐かしむように演奏しうたう。聴き親しんだ曲が多いが、どの曲も Ray 翁色の唄と化していて、一曲一曲が味わい深い。極上の「ヒューマン･ソング」。全 17 曲。2017 作。Wonderland)

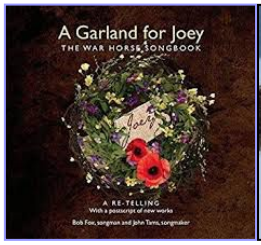
*LISA KNAPP:Till April Is Dead - A Garland of May　　B
（「春眠暁を覚えず」というか、「春」の訪れを夢見心地のまま感性を優しく研ぎ澄ませて、柔らかな感性で伝統歌の数々をLisaがシンギングした春いっぱいなトラッドだが、ブリティッシュ・フォークっぽいアルバム。川のせせらぎの音や鳥の鳴き声や鳩時計の時報を知らせる音や奏法の枠を超えたどちらかと言えばノイジーで愉快な各種楽器の音などが鳴り響く中、Lisaは春の夢の中で遊ぶ少女のように春向けの伝統歌を口ずさむ。奇跡の一枚。全12曲。2017作。Ear To The Ground）
*LISA KNAPP:Wild And Undaunted　　B
（一枚目。2006年。Ear To The Ground）

[CD{DVD}/FAIRPORT&ALBION FAMILY]



（Richard Thompson）
*RICHARD THOMPSON:13 Rivers　　B
（現役バリバリのR.Thompsonの新作。R.T.は天使と悪魔、善と悪など相反する理念の幅でもやもやした情感をはき出すように唄と音楽にする。R.T.の重苦しいヴォーカルと不屈のエレキギターとロックは、本人が唄に込めた情感をストレートに表現していて、今のR.T.には何かが乗り移っているとしか思えないほど、感動の深さが深く孤高。相撲ではないが「心技体（ではなく音）」がばっちり充実。いちリスナーが口を挟む余地なし。2018作。Proper）
*JUDY DYBLE:Earth Is Sleeping　　B
（その昔Fairport,Trader HorneのシンガーでGiles,Giles & Fripにも参加したJudy Dybleの新作。2017年の５曲入ミニアルバム"Songs In Waiting"全曲と新録曲８曲を加えた13曲。昔取った杵柄の底力は強い！本作発売時68歳のJudyの本作は、Giles,Giles & Frip的プログレのセンスを抑え気味に活かした白昼夢的なブリティッシュ・フォーク。英国風美意識のセンスに充ちた夢見心地なJudyのヴォーカルと優美なサウンドは、彼女の音楽の静かな集大成のように円熟を極めている。ヴォーカルを含め、すべてのサウンドが英国情緒に充ちている。Produced by Alistair Murphy。2018作。Acid Jazz）

[CD/ＥＮＧＬＡＮＤ]





(Bob Fox&John Tam)　(Maddy Prior with)

*BOB FOX & JOHN TAMS:A Garland For Joey　B

(副題"The War Horse Songbook"。「ウォー・ホース～戦火の馬～」は、1982 年に出版されたマイケル・モーパーゴによる児童小説を舞台化した演劇で、スティーヴン･スピルバーグ監督により映画化もされているが、本作は演劇のために John Tams がトラッドのスタイルで作詞作曲した唄の中からハイライトの唄を Bob Fox がギターの弾き語りでうたったアルバム。驚くのは、Bob Fox の 60 歳半ばを過ぎてもなお、70～80 年代に Stu Luckley とのデュオで味わわせた英国トラッド調に毅然として、円やかにコブシの利いたシンギングと、ドキッとするほど、70 年代英国トラッドの空気に充ちたきららかなギターの音色を発していること。Bob Fox 自身、本人が最も輝けるスタイルのシンギング･スタイルとギターとで、じっくりと演唱することに意識を傾けたかのような熟成感が感じられ、味わい深い。なぜか、Sandy Denny がうたったら生えそうな雰囲気の曲が多いような。全 12 曲。2017 作。Fledg'ling)

*MADDY PRIOR WITH HANNAH JAMES & GILES LEWIN
:Shortwinger　B

(Steeleye Span のアコースティック版の趣の Maddy Prior{ヴォーカル} with Hannah James{ヴォーカル､ｱｺ} & Giles Lewin{ヴォーカル､ヴァｲｵﾘﾝ､ヴィｵﾗ､ﾊﾞｸﾞﾊﾟｲﾌﾟ他}のトリオによる待望の二作目。Maddy Prior 長年のテーマである民俗神話を題材にしたアルバムだが、まるで Tim Hart & Maddy Prior 時代に回帰するような英国フォーク＆トラッド志向の男女のシンギングと Giles Lewin と Hannah James が紡ぎ出す英国風抒情は、Maddy 自身のルーツ回帰的な、何ものにも代えがたい初々しい英国フォーク＆トラッドの味わいだ。英国フォーク･ファンは初心回帰の心地よさ。若草の輝き。2017 作。Park)

*THE RHEINGANS SISTERS:Bright Field　B

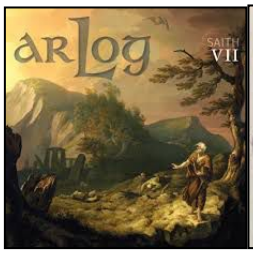
(Rowan{ﾌｨﾄﾞﾙ､ヴィｵﾗ､ヴォーカル､ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ} & Anna{ﾌｨﾄﾞﾙ､ヴォーカル､ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ他} Rheingans 姉妹の新作で三枚目。スウェーデンのフィドル･ミュージックの影響を強く受けつつ、シンギングに関しては極めてイングランド的な気品と美しさを持つ姉妹の音楽は、本作でも絶好調。二台のフィドルは、スウェーデン調の美しい音色を輝かせて舞い踊る。美しく清々しい姉妹の北欧風味の、しかし感性は極めてイングランド的なトラッド･アルバムだ。天下一品。2018 作。Rootbeat)

*MOONRAKERS:Tides　C

(Moonrakers は三姫一太郎～Jon Bennett{ヴォーカル､ｷﾞﾀｰ､ﾌﾞｽﾞｰｷ他},

Sarah Fell{ヴォーカル、ギター},Eleanor Dunsdon{ハープ、ヴォーカル}.Liz Van Santen{フィドル、コンサーティーナ、ヴォーカル}の四人組トラッド・グループ。レパートリーはイングランドとスコットランドを中心にした伝統曲と自作曲だが、ハープをフィーチャーした音楽は米国のGolden Boughのような柔和さやふくよかさのある爽やかトラッド。美しく清爽感のあるSarahのシンギングとセンスの良さが光るEleanorのハープはGolden Boughの音楽を超える魅力を輝かせている。全13曲。2017作。Moonraker)

[CD/ＷＡＬＥＳ]



(Ar Log)



(Blodau Gwylltion)

*AR LOG:Saith VII B

(何とAr Logの22年振りの新作で通算11枚目。2016年には結成40周年記念ツアーで、21カ国でコンサートをしたという。メムバー7名の内５名は白髪頭。図書館に行って、ウエールズのトラッドを掘り起こして、演唱する姿勢は相変わらずだが、結成40周年の祝宴の気分は本作にばっちり注入されていて、シンギングもウエールズ独特な男性コーラスも、二台のハープ、二台のフィドル、二台のギター、ピアノによる演奏も、彼らが創り上げたウエールズのトラッドのスタイル音楽が響き合っていて、また泣ける曲も含めて慶びの気分に充ちていて、幸せな気分になる。ブックレットの裏面の写真では皆さん笑顔。リスナーも幸せ気分保証。曲目英訳付。2018作。Sain)

*BLODAU GWYLLTION:Llifo Fel Oed B

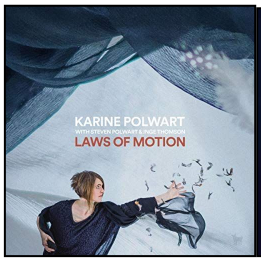
(Blodau Gwylltionは小説家で女性SSWのManon Steffan Rosとギター奏者のElwyn Williamsの二人組。全曲ウエールズ語で、母親がうたっていたというトラッド曲一曲以外は全曲Manonの自作曲。赤子を寝かせ付けるようにそっと優しくうたうManonの唄も、Elwynの繊細で穏やかなアコースティック・ギターの響きも、この世の物とは思えない穏やかで普遍性が感じられる響きがあって、ほんわかと心和んでしまう不思議に心地よい音楽。唄は川や海や湖や水をテーマにした唄が多く、本作の最後に収録された"Plant Bach"{この曲からアルバム・タイトルを採ったという}は、親から子へと受け継がれる永遠の命というようなものを花に置き換えて唄にした唄。Manonの唄は素朴だが感動は海より深い。Manonの父親のSteve Eavesは、Sutherland BrothersやAl Stewartとも共演経験のあるSSWらしい。2018作。Gwymon)

*CALAN:Deg - 10 A

(前作"Solomon"でウエールズを代表するトラッド・バンドに成長

した三姫二太郎の五人組の Calan の新作。新録曲３曲とライヴ音源曲２曲{特にこの二曲は圧巻。}とシングル盤収録曲を新たにリミックスした２曲と既発売アルバムから 11 曲の計 18 曲収録。ソリッドに勢いのあるケルティックな音楽と男女のシンギングは、今日のケルティック･ミュージック･シーンの最前線に立つ魅力を放っていて、非の打ち所がない。ウエールズのダンスのリズムを活用した躍動感あるサウンドや女性シンギングをフィーチャーしつつ、男女一体となったシンギングなど、トータルに充実さがみなぎっていて、華もあるし、馬力もある。2018 作。Sain)

［CD/ＳＣＯＴＬＡＮＤ］









(Karine Polwart)　(Maeve Mackinnon)　(Brian&Fiona)　(Fara)

*KARINE POLWART:Laws Of Motion　B

(前作"A Pocket Of Wind Resistance"から、SSW として、またフォーク･シンガーとして新たな世界を創り始めた Karine だが、本作もその延長線上の Lau の Martin Green との共作曲を含む自作曲を中心にしたアルバム。Karine の作る唄は、イメージがどんどん広がる歌詞だが、唄として生まれた Karine の唄は、木漏れ日のようにキラキラ光るサウンドを伴って、山間の曲がりくねった川をカヌーに乗って下るように爽快で、また空を舞う鳥のように雄大。６曲目に"Matsuo's Welcome To Muckhart"という Karine が作詞し、Martin と Karine が作曲した曲が収録されている。この関東大震災で家族を亡くし、長旅をして英国に来て、英国の庭に「楽しみ」を見つけ、英国で没した日本人庭師の物語は、特に感動が深い。これを SSW アルバムとするならば、極めてグレイドの高いアートな SSW アルバムになる。w. Steven Polwart{ｱｺｰｽﾃｨｯｸ･ｷﾞﾀｰ、ｴﾚｷｷﾞﾀｰ}, Inge Thompson{ｱｺ、ｸﾞﾛｯｹﾝｽﾋﾟｰﾙ、ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ、ｼﾝｾ他}。2018 作。Hudson)

*MAEVE MACKINNNON:Stri　B

(スコットランド･ゲール語のトラッド･シンガーの Maeve の６年振りの新作で三枚目。Kenna Campbell や Mairi MacInnes を師とする Maeve のゲール語の伝統歌に対する姿勢は、例えば Capercaillie のカレン･マシスンのような伝統歌の現代化による蘇生。Maeve のシンギングは、自身がゲール語の響きの不思議さや歌詞に込められた様々な情感を味わうかのような余裕のあるシンギングで、何とも味わい深い上に、ゲール語の伝統歌の＋αの魅力を創り出している。プロデューサーの Duncan Lyall の手腕は見事で、各種バグパイプやフィドルなどスコティッシュ･サウンドをベースにシンセやベースやドラムスなどを絶妙に溶解させたフレッシュで

クリーミーなスコティッシュ･サウンドは､Maeve の唄の世界をケルティックに彩っている｡絶品｡w.Duncan Lyall,Ross Martin,Brian McAlpine,Martin O’Neill,Patsy Reid,Ali Hutton,Jarlath Henderson,Kathleen MacInnes,Ewen Henderson,Ian Mackinnon｡歌詞英訳付｡2018 作｡Maeve Mackinnon)

*BRIAN O hEADHRA & FIONA MACKANZIE:Tir B

(Anam の Brian Ó hEadhra と Fiona Mackenzie の両ヴェテラン･ケルティック･シンガーのデュオによる新作｡本作での二人のハイランド地方への想いや伝統歌などへの意気込みは尋常じゃない｡これまでの音楽経験すべてを二人の熟達したゲール語のシンギングとシンプルながら先鋭的なスコティッシュ･サウンドとで一点集中的に創作された本作は､ゲール語によるトラッド･アルバムとして孤高の輝きを放っている｡前向きでたっぷり充実した二人のシンギングは､先鋭的なサウンドが相乗効果を上げて､ルーツ志向でありながら､革新的なスコティッシュ･トラッドの世界を創り上げている｡珠玉の逸品｡2018 作｡Anam Communications)

*BRIAN O hEADHRA & AIMEE LEONARD:Saoirse B

(Anam の Brian と Aimee の二人によるヴォーカル･デュオ･アルバム｡70 年代優美ブリティッシュ･フォークにアイリッシュ＆ケルティックな優美さを織り交ぜたようなコンテンポラリー･フォーク｡Aimee と Brian のほわっと夢見心地なヴォーカルとケルティック情緒なアコースティック･サウンドが魅力でしたね｡1995 作｡Anam)

*ANAM:Tine Gheal/BrightFire(2000 作｡Linn) B

*FARA:Times From Times Fall B

(オークニー島出身の女性四人組 Fara～Jeana Leslie{ﾘｰﾄﾞ･ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾌｨﾄﾞﾙ},Catriona Price{ﾌｨﾄﾞﾙ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Kristan Harvey{ﾌｨﾄﾞﾙ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Jennifer Austin{ﾋﾟｱﾉ､ｳﾞｫｰｶﾙ}～の待望の新作｡デビュー作も｢ヤッホー！｣だったが､本作も｢ヤッホー！｣の快進撃｡複数のフィドルによるスコティッシュはともすると､ノリに任せて単調に陥りがちだが､彼女達の演奏は､音色もリズムも細やかで演奏のアイデアが豊富で､多才で多彩なスコティッシュに舌鼓を打たせる｡一曲一曲にドラマがって､滅茶苦茶カッコイイ！ピアノがベースギターのような効果を出している｡加えて歌心あるトラッド･シンガーならではの､清楚で心に沁みる美しいシンギング｡どれもがまぶしい｡今最も輝いてるバンドの一つ｡2018 作｡CPL-Music)

*FARA:Cross The Line B

(｢ヤッホー！｣のデビュー作｡2017 作｡CPL-Music)

*JOSIE DUNCAN & PABLO LAFUENTE:The Morning Tempest B

(2017 年の BBCRadio 2 の"Young Folk Award"賞受賞の男女の二人組 Josie Duncan{ｳﾞｫｰｶﾙ}&Pablo Lafuente{ｷﾞﾀｰ}のフレッシュなデビュー作｡スコットランドのゲール語の伝統歌三曲他をうたう Josie 嬢のシンギングは泣ける曲も意気揚々とした曲も軽やかで､正に新緑な輝きと初々しさ｡微に入り細をうがつ胸キュンなシンギングは天賦の才能としか思えない素晴らしさ｡｢新緑｣なのは相方のギターの伴奏もまたスコットランド生え抜きの若手演奏家

達の演奏も同じ。2018 作。Oak Ridge)

*ELLEN MITCHELL:On Yonder Lea B

(副題"Scots Songs & Ballads"。グラスゴー出身の女性トラッド・シンガーの Ellen Mitchell の 2002 年作。音楽好きの父や親族の影響で常に音楽が興味の中心だったという Ellen は、学校やキャンプなどで唄に親しみ、フォーククラブやフェスティバルとの出逢いからトラッドに傾倒していったという。Ellen の自然体のシンギングは、適度に抑揚感を保ち、素朴で温かく気高い。"Rue And Thyme","Mary Mild","Clyde's Waters"他全 14 曲。w.Jack Beck {ｷﾞﾀｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ},Tom Spiers{ﾌｨﾄﾞﾙ}。曲目解説付。2002 作。Living Tradition)

*DAIMH:Moidart To Mabou A

(2000 年リリースの Daimh のデビュー作。現在も残っているメムバーは、Angus MacKenzie と Ross Martin{ｷﾞﾀｰ}と Gabe McVarish{ﾌｨﾄﾞﾙ}の三名のみ。改めて聴くと、Colm O'Rua のバンジョー＆マンドーラと James Bremner のバウロンが加わった五太郎による音楽は、ケープブレトンの曲を中心にアイリッシュとスコティッシュを加えたおじん臭い選曲で、古いスコティッシュや古いアイリッシュの香りに充ちた音楽で、これはこれでメッチャ心惹かれる。二曲だけだが、Anne Martin のゲール語の清いシンギングは、心に沁みる。2018 年の"The Rough Bounds"が逆に若々しく進化しているのが面白い。2018 作。Daimh)

*ANNE MARTIN:Co.. A

(20 年前のベスト・セラー。副題"Gaelic Song from the Isle of Skye"。w.Fiona MacKenzie,Sandra MacKay,Iain MacDonald, Malcolm Jones,Ingrid Henderson,Iain MacFarlane,etc.1998 作。Whitewave)

*DOUGIE MacLEAN:A Robert Burns Selection ¥2390

(1982 年の"Craigie Dhu"から１曲、1988 年の"Real Estate"から１曲、1991 年の"Indigenous"から２曲、1995 年の"Tribute"から６曲そして新録曲１曲"Heiland Harry"を加えた全 11 曲収録の Robert Burns ソング集。2018 作。Dunkeld)

[CD/ＩＲＥＬＡＮＤ] (NOW ARRIVAL)



(Eilís Needham)

*EILIS NEEDHAM:Fuinniúil C

(カタログ発行後入荷。Eilís Needham はスライゴー出身のアイリッシュハープ奏者で、2018 年、15 歳以下ハープ部門のオールアイルランド・チャンピオン。詳しくは次回コメントすることにする

が､少し聴いた印象は滅茶苦茶フレッシュなアイリッシュハープ音楽｡アイリッシュに真っ直ぐなハープ演奏がキラキラしてる印象｡全 14 トラックの全 19 曲｡2018 作｡Eilís Needham Music)

［CD/ＩＲＥＬＡＮＤ系］

デジパック･タイプを含め､元々開封されているものが多数あります。







(Helen Diamond)　(Steph Geremia)　(Josephine Marsh)

*HELEN DIAMOND:Helen Diamond　C

(Tara & Dermy Diamond 夫妻の娘のトラッド･シンガーでフィドラーの Helen Diamond のソロ｡Martin Carthy や Watersons や Copper Family 等のイングランドのトラッド･シンギングに影響を受けたという無伴奏シンギングは､1970 年代初め頃の Topic や Trailer のトラッド･シンガーの名唱をホーフツさせる素晴らしさ｡アイルランドのトラッドを中心にイングランドやスコットランドのチャイルド･バラッド数曲を加えた選曲で､幼かった頃に父親が好きだった曲や Len Graham や Paddy Tunney や Martin Carthy など Helen の親やその上の世代のアイルランドやイングランドのシンガーの持ち唄等を毅然とシンギングする｡心はトラッド特集中のブラックホークへ｡Altan のマレードも絶賛｡最近 Skara Brae, Bothy Band のトリーナとも共演｡全 13 曲｡曲目の解説と歌詞付｡2018 作｡Helen Diamond)

*DANNY DIAMOND:Elbow Room　C

(Tara &D ermy Diamond 夫妻の息子で､フィドラーの Danny のソロ｡Danny のアイリッシュ･フィドルは奥が深い｡まるでアイリッシュ･フィドルの酸いも甘いも知ったフィドラーのように素朴に渋くこぶしを利かせて演奏する｡かと思えば､激流の演奏を垣間見せもする｡超然としたプレイは見事としか言いようがない｡2017 作｡Danny Diamond)

*STEPH GEREMIA:Up She Flew　C

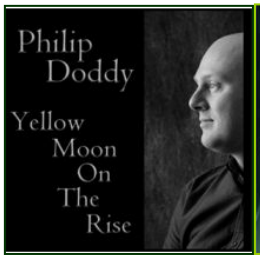
(Alan Kelly Gang のメムバーで若手でピカーのアイリッシュ･フルート奏者のソロ二枚目｡Peter Horan などのスライゴー･スタイルの奏法を基本にした浮遊感ある演奏の何と素晴らしいこと！Alan Kelly Gang の活動やケルト圏の多くのミュージシャンとの共演の経験から身につけたであろう多彩なアイリッシュは､今が旬の輝きを放っている｡フルートの音色が自由に舞い踊る感じだ｡近年では飛びっ切りのアイリッシュ･フルート･アルバム｡一曲だけだが､Carmel Gunning から教わったという唄で美声を聴かせている｡w.Alan Kelly, Seamie O'Dowd, Jim Murray, Donal O'Connor, Jim

Higgins,Michael Rooney,Aaron Jones,Ben Gunnery,Martin Brunsden。"One of the most promising young flute players around...an unexpected treasure"とは Irish Music Magazine。2018 作。Black Music)

*JOSEPHINE MARSH:Music In The Frame ¥2390
(アイルランド屈指のアコーディオン奏者として、もうほぼ過去の人になっていたアコ奏者 Josephine Marsh の 1995 年の一枚目のソロ以来、23 年振りの新作。本作はトラディショナルの中にアイリッシュ・スタイルの自作曲や Liz Carroll の曲などを織り交ぜたアイリッシュ。リズムは様々だが、音楽が流れるように軽やかで、気分は爽快。聴いてるだけで、野原でダンスする気分。演奏家として長い間活動してきて、今は弾いて気持ち良い曲だけを一人で、あるいは仲間と演奏して作ったアルバムといった印象。その仲間は、Seamus Cahill{ｷﾞﾀｰ},Pat Marsh{ﾌﾞｽﾞｰｷ},Angelina Carberry{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ},Mick Kinsella{ﾊｰﾓﾆｶ､ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ},Steve Larkin{ﾌｨﾄﾞﾙ},Gerry Madden{ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ},Jack Kinsella{ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ},Andrew Kinsella{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}。2018 作。Josephine Marsh)

*JOSEPHINE MARSH:Josephine Marsh D
(1995 年のデビュー・ソロ。正にマジカルなアイリッシュ。w.Patrick Marsh,Jim Higgins,Catherine Custy,Eithne Ni Dhonaile,Paul O Driscoll,etc. 1995 年コピーライトのオリジナル盤。在庫僅か。Josephine Marsh)

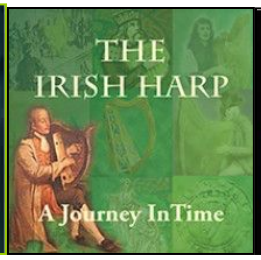
*THE JOSEPHINE MARSH BAND:I Can Hear You Smiling C
(J.Marsh{ｱｺ､Declan Corey{ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ､ﾌﾞｽﾞｰｷ},Tommy Carew{ｷﾞﾀｰ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Paul O Driscoll{ﾀﾞﾌﾞﾙﾍﾞｰｽ}による鉄壁のアイリッシュ。2001 作。在庫僅か。Josephine Marsh)



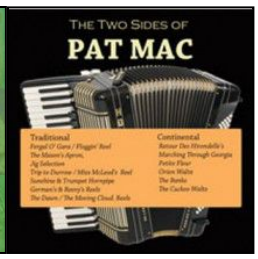
(Philip Doddy)



(Enda Seery)



(Sharon Carroll)



(Pat McNamara)

*PHILIP DODDY:Yellow Moon On The Rise ¥2390
(スライゴーのトラッド・シンガーの Philip Doddy の三枚目。Philip は一度聴くと心に焼き付く独特な味わいのあるシンガーで、"As I Roved Out"や"The Mountains Of Pomeroy"や"On Raglan Road"等などトラッドの名曲を侘び寂びの節回しで、自身唄に酔い、じっくり味わうようにシンギングする。Caroline Locke のピアノの伴奏と Brian McDonagh のマンドーラの伴奏で、聴き親しんだアイルランド民謡がまた違った味わいで味わわしてくれる。スルメ味のアイルランド民謡。2017 作。Philip Doddy)

*ENDA SEERY:Raining Notes ¥2390
(副題"Irish Traditional Music On Flute And Whistle"。Enda Seery のフルートとホイッスルの演奏は、約 30 年前にホイッスル奏

者 Vinnie Kilduff の"The Boys From The Blue Hill"を聴いたときに心弾んだような、今の時代に珍しい素直に楽しめるアイリッシュ。Enda はテクニックを誇張することも、地域色を特に打ち出すこともしない。フルートやホイッスルで演奏して楽しく、リスナーは聴いて心地よいアイリッシュのオンパレード。w. John Byrne{ｷﾞﾀｰ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}, Aidan Guilfoyle{ﾀﾞﾌﾞﾙﾍﾞｰｽ}。ライナーで Kevin Crawford と Maurice Lennon が賛辞のコメントを記している。2018 作。Enda Seery Music)

*SHARON CARROLL:The Irish Harp - A Journey In Time ¥2390
(北アイルランドの女性アイリッシュハープ奏者でハープ教師の Sharon Carroll の本作は、オカロランの時代のハープの優雅さや厳かさのあるアイリッシュハープ･アルバム。独自のアレンジで個性的な演奏をするハープ奏者が多い中で、彼女の演奏は伝統的な奏法に従っていて、ある意味正統的なハープ演奏がじっくり楽しめ、味わえる。全 15 曲中、Clara Wilson のヴォーカルをフィーチャーした曲が二曲。内一曲は「庭の千草」。一曲目と最後の曲は生徒達とのハープ･アンサンブル。曲目解説付。2017 作。Tommakesmusic)

*PAT McNAMARA:The Two Sides Of Pat Mac ¥2390
(Tulla Céili Band のアコーディオン奏者だったというクレアのアコ奏者 Pat McNamara のソロ。おそらく 1970 年代か 80 年代の演奏だろう。前半 7 トラック{10 曲}がアイリッシュで後半 6 トラックが"Continental"。こんな早い演奏でダンスできるの?!とつい思ってしまう Pat の早弾きは、もの凄い。アコがギンギン即興しているのに対して、ベースギターがメトロノームのようにきっちりリズムを刻んでいるのが、何とも愉快。後半"Continental"は、打って変わってヨーロッパや米国のノスタルジック･ムードの音楽。何とザ･ピーナッツのヒットで有名な"Petie Fleur"{「可愛い花」}も。気分は 60 年代？！おそらくカセット･アルバムの 2018 年再発。Trad Ireland)

*CLANNAD:Turas 1980 ¥2590
(1980 年、ドイツのブレーメン大学で開かれた Clannad の二枚組ライヴ。音源はラジオ･ブレーメン。1980 年と言えば、彼らの四枚目"Crann Ull"が発売された年。アイリッシュ･トラッドを志向していながら、Clannad 流の幽玄なアイリッシュ･トラッドを果敢に創作していた初期 Clannad のケルトの香りがほのかに漂う魅惑のアイリッシュ。全 20 曲夢の中。2018 作。MIG)

*MIKE MCGOLDRICK & DEZI DONNELLY:Dog In The Fog B
(M. MCGoldrick{ﾌﾙｰﾄ、ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ、ﾊﾞｳﾛﾝ}と Dezi Dnnelly{ﾌｨﾄﾞﾙ、ヴィオラ}の二人による新作。Mike と Dezi が二人の生まれ故郷のマンチェスターで出逢って演奏したのが二人が８歳か９歳のとき。本作は一曲一曲についての思い出が綴られていて、いわば二人の思い出曲集で、様々なアイリッシュのオンパレード。二人が心合わせて奏でるアイリッシュの響きは終始優しい。四つ折りのジャケットを開けば、中年おっさんになった二人の写真。さらに開けば、少年時代の二人の写真。全 28 曲/12 トラック。2018 作。Boxroom Music)

*SKIRM & DEZI DONNELLY:Welcome C
(副題"Live In Hamburg"。Skirm{ヴォーカル､ギター}と D.Donnelly{フィドル}の二人組による 1995 年のライヴ。今聴くと､Dezi のフィドルは Dezi の叔父の Des のフィドルと音色から何もかもそっくり。在庫数僅か。1995 作。Magnetic Music)
*KEVIN BURKE:An Evening With Kevin Burke B
(副題"Tunes & Stories"。2016 年１回と 2017 年２回の計３回のソロ･コンサートのライヴ音源からのライヴ盤。終始 Kevin Burke のスッピンの弧高感のある美しいフィドル演奏。2018 作。Loftus)
*THE HIGH SEAS:The High Seas ¥2390
(Antóin Mac Gabhann の娘の Caitlín Nic Gabhann{コンサーティーナ､ダンス}と Altan の Mairead の甥の Ciarán Ó Maonaigh{フィドル}の Caitlín& Ciarán 夫妻にシャンノース･シンガーでフィドル＆ブズーキ奏者の Cathal Ó Curráin を加えたトリオによる新作。いやはや Caitlín &Ciarán のお二人を要にした音楽の絶品なこと！それもひけらかす演奏ではなく､各メムバーの演奏は細やかで､呼吸をするようにテムポがよく､演奏者同士が最も気持ち良く響き合える音楽を創り上げている。伝統音楽にまみれて育って､その中から美しく咲いた蓮の花のように真に芯から美しいアイリッシュ･ミュージックだ。2018 作。The High Seas)
*ANTON MacGABHANN & CAITLIN Nic GABHANN
:Tobar Bhride ¥2390
(Antóin MacGabhann{フィドル}と Caitlín NicGabhann{コンサーティーナ､ダンス}の父と娘による初アルバム。父親を通してアイリッシュに親しんでその道を進んで､父親とはまた違うアイリッシュの美しい花を咲かせている娘､その親子が親しんできた思い出の音楽を仲睦まじく演奏したアルバム。思い出の音楽には､Caitlín と Ciarán の結婚式で父 Antóin が Caitlín のために作った曲や Caitlín のコンサーティーナの先生だった Rena Traynor{1995 年没}を偲ぶ催しで､Caitlín が作曲したという曲や 1970 年代初めに Antóin が働いていたところで聴いて好きになったというコークのバンドの演奏曲や昔クレア･フィドラーの Junior Crehan から習ったという曲等々､色とりどり。w.Brian McGrath{ピアノ}。2018 作。Caitlín NicGabhann)
*THERESE McINERNEY:Down The Strand ¥2390
(クレアの女性アイリッシュ･フィドラーの Therese のデビュー作。Vincent Griffin や Paddy Canny や Bobby Casey などのクレアのフィドラーの影響を受けたという彼女のフィドルは､クレアの曲のみならず様々なアイリッシュをクレアのフィドル･ミュージックの空気を保持したまま健やかに演奏していて､爽快。彼女はシンガーでもあって､アパラチア民謡や Iarla O Lionaird のシンギングを聴いて好きになったというゲーリック･ソングなど三曲をピアノとフィドルの 伴奏で清々しくシンギングする。2017 作。Therese McInerney)
*PETE QUINN,KAREN RYAN,ANDREW MacNAMARA
:From Camden To Tulla ¥2390
(ロンドンの Cherish The Ladies と思っている London Lasses のフ

ィドル奏者の Karen Ryan とご主人の Pete Quinn がクレアのヴェテラン･アコーディオン奏者の Andrew MacNamara のお宅に乗り込んで？セッションしたアルバム。クレアのケーリー･バンドっぽいのと、古きロンドンのパブ･セッションっぽいのが混ざりあったような、ちょっぴり古そうで、恐ろしく小刻みに躍動感のあるダンスの空気に充ちた軽やかで楽しいアイリッシュ。2017 作。Lo La)

*BILLY CLIFFORD & GERRY HARRINGTON
:Now She's Purring ¥2390
(シュリーヴルークラの二人の巨人 Billy Cliford{ﾌﾙｰﾄ}と Gerry Harrington{ﾌｨﾄﾞﾙ}によるデュオ･アルバム。昔、Julia & Billy Clifford の演奏で惚れ込んでしまったシュリーヴルークラ地方のアイリッシュ。今、二人の老人が手慣れた感じで、小鳥がさえずるように様々なタイプのアイリッシュをヒュルヒュルっと演奏する。音楽は今が旬。Julia さん、ラッパ付きのシュトロー･フィドルを持ってご登場。全 15 トラック。Billy Clifford)

*SEAN GARVEY:The Bonny Bunch Of Roses C
(タムボリンの 20 年前のベストセラー。アイルランドでは"Singer's singer"と呼ばれているケリー出身のゲール語も英語もレパートリーのトラッド･シンガーでギタリストの Sean Garvey の二枚目。彼の深く落ち着きのあるシンギングは、深く感動的。アイルランドの男性トラッド･シンガーで右に出るものはいない。本作後アルバム･リリースはないようだが、現在も現役。w.Mick Kinsella, Josephine Marsh, Liam Lewis, Eoghan Og Garvey。Produced by P.J.Curtis。在庫数僅か。2003 作。Harry Stottle)

*LEN GRAHAM:Do Me Justice(1983 作。Claddagh) D

*LEN GRAHAM:Ye Lovers All(1984 作。Claddagh) A

*SKYLARK:Light And Shade(1992 作。Claddagh) A

*NORTH CREGG:And They Danced All Night A
(Christy Leahy{ｱｺ}, Caoimhin Vallely{ﾌｨﾄﾞﾙ}, Ciarán Coughlan {ﾋﾟｱﾉ}, John Neville{ｳﾞｫｰｶﾙ､ｷﾞﾀｰ}, Martin Leahy{ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}の North Cregg の 1999 年のアルバム。ブルーグラスやスウィングにヒントにとびっきり躍動感のあるアイリッシュでワクワクさせ、SSW 的持ち味の John Neville の唄はピュアな弾き語り SSW 風とアイリッシュ･カントリー風な風合いで清々しい。Produced by Niall Vallely & Frank Torpey。1999 年。Magnetic Music)

*BERNADETTE MORRIS:Where The Heart Is A
(Paul Brady が大絶賛した 2013 年のデビュー CD"All The Ways That You Wander"から５年。その間、結婚そして一児の母親になったという女性アイリッシュ･シンガーの Bernadette の５曲収録ミニアルバム。デビュー CD がトラッド志向だったのに対し、本作は日常生活で感じた想いなどを Bernadette 自身が自作･共作で作ったオリジナルなアイリッシュ･フォーク。曲の構成はまるでアイリッシュの精鋭バンドの歌姫のような毅然としたシンギングが生えたタイプの曲が二曲と Mary Black がうたったら良さそうな心に響く名曲タイプのアイリッシュ･ソングが三曲。全曲、トラッドをうたうのと変わりなく、アイリッシュの香りが高い。絶品。2018 作。

Bernadette Morris)
*BRENDAN MULHOLLAND･CONOR LAMB･DEIRDRE GALWAY
:Music In The Glen C
(Réalta のイリアンパイプス&ホイッスル奏者の Conor Lamb と Réalta のギター奏者の Deirdre Galway と Conor Lamb のホイッスルの先生で、"Jean's Hill"という素晴らしいアイリッシュ･フルート･アルバムを発表しているフルート奏者の Brendan Mulholland のトリオによる新譜。ゲスト:Dermot Moynagh,Neil Martin, Christine Galway,Dónal O'Connor。「This is incredible music!」とは Lúnasa の Kevin Crawford。2018 作。BCD01)
*FERGUS McGORMAN
:Sweeping The Cobwebs Out Of The Sky ¥2390
(スライゴー/ロスコモン･スタイルの名フルート奏者 Catherine McEvoy を母に持つ Fergus McGorman の爽快デビュー作。曲目はデダナンのレパートリーだったり、Liam O'Flynn から学んだ曲だったり、オカロランの曲だったり、地域に関係なく好きなアイリッシュを清々しい朝に、最高な気分で演奏したかのように最高に気持ちの良い音楽。。w.Paddy McEvoy{ﾋﾟｱﾉ},Ruairi McGorman{ﾌﾞｽﾞｰｷ}, John Blake{ｷﾞﾀｰ}。2017 作。Fergus McGorman)
*JIM McKILLOP:Tribute A
(ユニークなアイリッシュ･フィドラーの Jim McKillop の 2007 年のアルバム。ユニークというのは、アイリッシュの選曲も多彩な上にシェトランドやスコットランドやラグタイムや Ry Cooder に捧げたカントリータッチの曲やハンガリーのダンス曲やジャンゴ･ラインハルト風ホーンパイプ等々、国境もジャンルも超えて、様々な風合いのフィドル音楽をやってのけていること。アイリッシュもメチャ上手い。驚きの全 23 トラック。Jim さんと一緒にいるワンコロも「音楽最高!」と吠えてるよう。フィドル･ファン笑顔保証。w.Pat Conroy{ｷﾞﾀｰ}、James Quinn{ﾋﾟｱﾉ}。2007 作。OnLine Music School)
*MIKE & MARY RAFFERTY:The Road From Ballinakill A
(Mike Rafferty{ﾌﾙｰﾄ}と Mary Rafferty{ｱｺ}の父と娘のデュオ･アルバム。Mary は Cherish The Ladies のメムバーで現在元 Danu の Donal Clancy の奥さん。もうほんとんどのアイリッシュ･ファンがご存じのようにアイリッシュのコアの旨みがたっぷり味わえる不滅の名盤。w.Donal Clancy{ｷﾞﾀｰ},Gabriel Donohue{ｷﾞﾀｰ､ﾋﾟｱﾉ､ﾊﾞｳﾛﾝ},Willie Kelly{ﾌｨﾄﾞﾙ},Kathleen Glyn{ｳﾞｫｰｶﾙ}, Michael Rafferty{ｳﾞｫｰｶﾙ}。2000 作。Mike&Mary Rafferty)
*MICHO RUSSELL
:Traditional Irish Music From County Clare ¥2800
(在庫数僅か。1997 年作。Celtic Music)
*DAN HERLIHY & JOHN DREW:The Ballydesmond Polka A
(副題"Traditional Irish Music From Sliabh Luachra"。子どもの頃に Tom Billy,Din Tarrant,Jack O'Connell,Padraig O'Keeffe などのようなシュリーヴルークラの演奏家の影響を受けたというアコ奏者 Dan Herlihy が Dan の音楽に興味津々なマンドチェロ奏

者の John Drew と組んで制作したシュリーヴルークラの音楽。Dan のアコ演奏は孤高というか、集中力のあるというか、これまでに聴いた名だたる演奏家によるシュリーヴルークラの音楽の中で、もっともスッピンな感じのする見事な音楽。全 14 トラック全曲が耳に新鮮。2000 年頃のリリース。DHJDCD001)

*3 TRIUR:Omos A

(Peadar O Riada{ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ},Caoimhin O Raghallaigh{ﾊﾙﾃﾞｲﾝｸﾞﾌｪｰﾚ},Martin Hayes{ﾌｨﾄﾞﾙ}のトリオ"3 Triur"の三枚目。全曲 Peadar の自作曲。Peadar はアイルランドの村々で伝承されてきた音楽、その音楽を継承し、演奏し、作曲した偉大な音楽家達やその音楽に磨きをかけてきた音楽家達に敬意を払い、自身が作曲した音楽を三人で演奏したもの。前二作同様、三人の演奏は暖炉のある部屋で、心通わせ演奏し合うような心に響く音楽。全 14 トラック。2013 作。Peadar O Riada)

*THE OUTSIDE TRACK:Light Up The Dark A

(アイルランド、スコットランド、カナダ、ノヴァスコシア出身による四姫一太郎の汎ケルティック・バンドの Outside Track～Teresa Horgan{ｳﾞｫｰｶﾙ、ﾌﾙｰﾄ}、Ailie Robertson{ﾊｰﾌﾟ、ｳﾞｫｰｶﾙ}、Fiona Black{ｱｺ}、Mairi Rankin{ﾌｨﾄﾞﾙ、ｳﾞｫｰｶﾙ}＋Cillian O'Dalaigh{ｷﾞﾀｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ}）～の五枚目。今、勢いのあるケルティック・トラッド・バンド。2015 作。Lorimer)

[CD/ＵＳＡ{ﾄﾗｯﾄﾞ、ｱﾊﾟﾗﾁｱﾝ他}]



(Hazel&Alice)

*HAZEL DICKENS & ALICE GERRARD
:Sing Me Back Home: The DC Tapes, 1965-1969 A

(女性カントリー＆フォーク・デュオのパイオニアの Hazel Dickens{故人} & Alice Gerrard の極く初期の宅録音源からの全 19 曲。収録は 1965-1969 年。オールドタイムや初期ブルーグラスの伝統歌のほか Carter Family や Louvin Brothers や Jimmie Rodgers などのカントリー・ソングやヒット曲などを、流行最前線のカントリー＆フォーク・サウンドの伴奏で、当時としては、目新しい女性ヴォーカル・デュエットで活き活きと演唱する。宅録が功を奏して、何の気兼ねなく、自分達流に二人でうたう楽しさがビンビン伝わってくる。今聴けば、唄も音楽も古臭く聞こえるが、音楽のエネルギーは真にポジティヴ。2018 作。Free Dirt)

*ALICE GERRARD:Bittersweet A

(アメリカン・フォークの大ヴェテランの Alice Gerrard の本作は、全曲自作曲の深い味わいのある素晴らしい SSW/フォーク・アルバ

ム。w.Laurie Lewis,Stuart Duncan,Bob Ickes,Bryan Sutton,
Todd Phillips,Tom Rozum,etc. 2013 作。Sprouce And Maple
Music)

*HEDY WEST:From Granmaw And Me B

(祖母の家系が何世代にも渡る英国からの米国移民の家系だというフォーク･シンガーの故 Hedy West{1938-2005}の新作。本作は Hedy が 1954 年から 1980 年に祖母の思い出の唄や物語を記録するためにレコーディングしていた収録曲から 11 曲を選んで収録したアルバム。すっかり米国のオールドタイム～アパラチアン民謡化した Hedy のシンギングとバンジョーやギターやフィドルの音色。英国系フォーク/トラッドという目線ではなく、親から子に Hedy 家で代々うたい継がれてきた庶民目線の民謡の味わいが深い。ふと Rosalie Sorrels の土着的な妖艶さを思い出した。ブックレットの解説もバッチリ。2018 作。Fldg'ling)

[CD/ＦＩＮＬＡＮＤ]



(Sans)


(Sans のメンバー)



(Okra Playground)



(Aallotor)

*SANS:Kulku C

(Andrew Cronshaw,Sanna Kurki-Suonio,Tigran Aleksanyan,Ian Blake の Sans のメムバーが出逢ったのは 2011 年のカウスティネン･フォークフェス。個人的にも大好きなフィンランド屈指のトラッド･シンガーの Sanna をヴォーカルに据えて、デビュー時以来独自のトラッドの世界を創作してきた Andrew Cronshaw が創作した異国情緒なフィニッシュ･トラッド風トラッドの世界。Sanna のシンギングをフィーチャーしたのは大正解。Sanna のスピリットの高い華のあるシンギングを中心に据えたことで、ともすると、とりとめのない空想音楽になりがちな Andrew の音楽が、Andrew 趣味の、ヴォーカルとサウンドとのバランスの取れた彩りある音楽に昇華されていて、今までに聴いたことのない優美で高潔な北欧風トラッドの世界を創作し切っている。長年毎年のようにカウスティネンに通うフィンランド音楽通の Andrew ならではの、フィンランド音楽の魂をシンギングと音で表現した唯一無二の魔法音楽だ。ゲスト参加の Kurki の娘の Erika Hammarberg の軽やかなシンギングも心躍らされる。2018 作。Cloud Valley)

*ANDREW CRONSHAW:Ochre C

(Andrew Cronshaw{ﾂｨﾀｰ、各種笛他},Natacha Atlas{ヴｫｰｶﾙ}、Llio Rhyddrerch{ﾄﾘﾌﾟﾙ･ﾊｰﾌﾟ},Abdullah Chhadeh{ｶｰﾇｰﾝ、ｳｰﾄﾞ},Bernard O'Neill{ﾀﾞﾌﾞﾙﾍﾞｰｽ},Matthaios Tsahourides{ﾘﾗ}による無国籍な、日本から見れば西域の悠久音楽風。雅楽のような響

きも。2004 作。Cloud Valley)
*OKRA PLAYGROUND:Ääneni Yli Vesin B
(Päivi Hirvonen,Maija Kauhanen,Essi Muikku の女性シンガーのシンギングをフィーチャーした三姫三太郎のどでかいフィニッシュ・トラッド・バンドの新作で三枚目。この三枚目で初めて彼らの音楽を聴いたが、ノッケからぶっ飛んでしまった。ヴァルティナをさらに磨き上げたフィンランド・スタイルのトラッドという印象で、三姫の力強いシンギングとカンテレ、フィドル、リラ、アコにドラムスとエレキベースを加えたワンランク上を志向する音楽は、深くルーツ志向でありかつ、ロックの勢いを持った無敵のトラッド。10 曲中９曲が伝統的な詩歌にメムバーが民謡スタイルの曲を付けたもので、古びた民謡が新たな命を得て、躍り出す。2018 作。Nordic Notes)
*AALLOTAR:Ameriikan Laulu B
(Aallotar はフィンランド系米国人のシンガーでフィドラーの Sara Pajunen とフィンランド人のシンガーでアコ奏者の女性二人組。16 歳の時に米国に移住したという Sara の祖母の出身地は Teija Niku の出身地から数時間内という。Sara の祖母と Teija とが同郷というよしみで共演し、生まれたのが本作。その「よしみ」という力は、二人を記憶の中のフィンランド民謡を二人の女性らしい優しい感性とスタイルでそっと蘇らす。二人のシンギングも演奏もフィンランド民謡の侘び寂びの心や心髄とも呼びたいものが息づいていて、感動的。フィンランド音楽ファンの深く琴線に触れる音楽。2018 作。Nordic Notes)
*MAIJA KAUHANEN:Raivopyörä B
(Folk'Avant のカンテレ奏者でトラッド・シンガーの Maija Kauhanen のソロ。彼女のカンテレの演奏はリズム感豊かでワクワクさせられる演奏で、ある種妖気さえ漂う彼女のシンギングは、そんな彼女のカンテレの演奏を伴って、彼女のオリジナルなフィニッシュ・トラッドな世界を創り上げている。圧巻。2017 作。Nordic Notes)
*KAREN TWEED・TIMO ALAKOTILA:Mid Summer May Monday C
(Karen&Timo のアコーディオンとピアノの演奏から編み出される音楽はアイリッシュ、スコティッシュ、ノルディックを中心に多彩だが、音楽性云々以上に音楽が自由で、朝露のように爽やかで、思いっきり健やか。昔フォークフェス通いをしていた頃、キャンプ地などでミュージシャン達が自由なセッションをしていたときに耳にしたような音楽とその風景を思い出してしまった。ゲスト:Catriona McKay{９曲も演奏}。2017 作。Akero)

[CD/ＮＯＲＷＡＹ]



(Margrete Nordmoen)

*MARGRETE NORDMOEN:Skal Du Langt B

(逢ったことのない昔々に生きた人々のことに想いを馳せながら、古謡をうたうのが好きで好きでたまらないと言う歌姫 Margrete の本作は、Margrete の自然体の北欧トラッド･スタイルのシンギングと Vegar Vardal のフィドルと Annar Nohre のギターの、これまた自然体の素朴で気品のある北欧風アコースティック･サウンドが心地よい新鮮度と好感度抜群の北欧トラッド･アルバム。Margrete のシンギングは、ただ唄が上手いというだけではなく、広い野原で伸び伸びとシンギングしているような活き活き感があって、気分が晴れやかになる。Margrete の唄に寄り添う演奏も北欧のフレッシュな空気に充ちて温かい。2018 作。Ta:lik)

*MATTISGARD & ROINE:Sudan Dudan B

(Marit Mattisgard{今の姓は Karlberg}と Anders Erik Røine の Sudan Dudan のデビュー作。当時もしびれたが、今も同じ。もう既に独自の北欧風フォーク＆ブルースの味わいを煎じ出していて、素晴らしい。タイプライターで打って作ったブックレットの文字が読みづらいのだけが問題。2006 作。Ta:lik)

*INGEBJORG LOGNVIK REINHOLDT:Songen Om Guro B

(若き歌姫 Ingebjørg は北欧トラッド風味満点の理想的なシンギングで、極北的に清いシンギングで魅了するのみではなく、柔らかなシンギングやダンスのリズムにのってリズミカルなシンギングでも魅了する。Sarah-Jane Summers{ﾌｨﾄﾞﾙ}, Juhani Silvola{ｷﾞﾀｰ}, Morten Kvam{ﾀﾞﾌﾞﾙﾍﾞｰｽ､ヴォｰｶﾙ}による伴奏は必要最小限ながら、先鋭さもある北欧トラッドのつぼを得た演奏で、Ingebjørg のシンギングの極北的質を高めている。2017 作。Talik)

[CD/ＳＷＥＤＥＮ]

*FOLK'AVANT:Gryningsland B

(スウェーデンの四人組女性ヴォーカル･グループの Kongero のシンガーの Anna Wikenius とフィンランドの名カンテレ奏者でシンガーの Maija Kauhanen そしてスウェーデンの名フィドル奏者でシンガーの Anna Rubinsztein のスウェーデンとフィンランドの女性トリオ。北欧の夜空に輝く星々ようなキリッとして美しい北欧音楽だ。Anna Wikenlus のシンギングは北欧トップ･クラス。2017 作。Nordic Notes)

[CD/ＬＡＴＶＩＡ]



(Lata Donga)

*LATA DONGA:Variacijas B

(Lata Donga は家族三世代続くという女性三名と男性一名から成るトラッド･シンギング･グループ。Asnathi Rancani と Aureli Rancani の娘二人のシンギングをフィーチャーしたソロ＆ハーモニーは、毅然として気高く、民族楽器のみならず様々な楽器の演奏で、ラトヴィアの様々な民謡を自由自在にシンギングし、楽しませ、釘付けにもする。彼女達の民俗性豊かなシンギングは美しくもあり、力強くもある。シンギングのコブシは、ブルターニュのシンギングをホーフツしさえもする。2018 作。Lauska)

*SYMBOLIC:Muzam Saule Debesis B

(五太郎から成るラトヴィアのフォーク･ロック･バンド"Symbolic"のデビュー･アルバム。デビュー･アルバムだが、結成は 2000 年の大ヴェテラン。民族楽器とロック楽器の混成だが、ドラムス、ベース、エレキギターが全面に出ていて、リード･ヴォーカルの Uldis Kakulis のラトヴィア魂を鼓舞する堂々たるシンギングと相まっヴォルテージの高いフォーク･ロックを体現している。2017 作。Lauska)

[CD/BELGIUM,FLANDERS]



(Helen Flaherty Band)

*THE HELEN FLAHERTY BAND:Gazing At The Moon B

(元 Shantalla のヴォーカルで屈指のスコットランド人トラッド･シンガーの Helen Flaherty の新ケルティック･バンドのデビュー作。メムバーは Ies Muller{ﾌﾙｰﾄ、ヴｫｰｶﾙ},Philip Masure{ｷﾞﾀｰ、ｼﾀｰﾝ、ヴｫｰｶﾙ},Siard de Jong{ﾌｨﾄﾞﾙ、ﾌﾞｽﾞｰｷ、ヴｫｰｶﾙ}。Shantalla と同じく音楽性はアイリッシュを中心にしたケルティックだが、Helen の名を冠しただけあって、本作は Helen のシンギングと Philip Masure のギター＆シターンの妙技を要に、フィドルとフルートがケルティックな芳香を添えるという音楽創りが成されていて、Helen のたおやかなシンギングは、かつてなく優艶で実に味わい深い。あまり

気がつかないことだが、メムバーによるコーラスがドローンのような効果を出していて、心への響きが深い。一人のトラッド・シンガーとしても円熟を極めている。タイトルではないが、「お月見」で夢うつつ気分。2018 作。Appel)

*SHANTALLA:Shantalla A
(Helen Flaherty{ヴォーカル、バウロン},Kieran Fahy{フィドル},Joe Hennon{ギター},Gerry Murray{アコ、ブズーキ他},Michael Horgan{イリアンパイプス、フルート、ホイッスル}の一姫四太郎から成る、デビュー作からトップ・ケルティック・バンドの躍り出た Shantalla の飛びっ切り「旬」のデビュー作。1999 作?Wild Boar Music)

*NARAGONIA QUARTET:Mira B
(Toon Van Mierlo{アコ、バグパイプ}と Pascale Rubens{アコ、ヴァイオリン}のオリジナル・メムバーに Maarten Decombel{ギター、マンドーラ}と Luc Pilartz{ヴァイオリン}を加えた Naragonia Quartet の新作。CD をかけ始めるや、聴き親しんだ Naragonia サウンド。三年前の前作の最後の曲に続く曲が本作の一曲目と思ってしまうほど、少しずつ曲調を変えながら、風の流れや水の流れのように曲がつながっているような、そして落ち葉がヒラヒラ舞い踊るようないつもの彼らの音楽。時々 Blowzabella っぽさを感じもするが、Naragonia が創り出す音楽は、極めて自然体のミュージシャン同士が響き合う音楽。2018 作。Home)

*NARAGONIA:Janneke Tarzan B
(Pascal と Toon の二人組時代の Naragonia の２枚目。アコと吹奏楽器の組合せでリズミカルに編まれた音楽は詩情豊かでダンサブル。最愛聴盤。2007 作。Appel)

[CD/ＰＯＲＴＵＧＡＬ]

*JOSE AFONSO:Contos Velhos Rumos Novos C
(ポルトガルを代表する国民的社会派フォーク・シンガーの Jose Afonso の 1969 年作。本作は発売された年の"Best Album"賞を受賞。ポルトガルの民族音楽に根ざした音楽と彼の人柄がにじみ出た柔和なヴォーカルはとても魅力的。1969 年/1987 作。Movieplay)

*CRISTINA BRANCO:Post-Scriptum/Mumurios ¥2800
(独特な感性を持つファドの歌姫 Cristina Branco の"Mumurios"{1998 年}と"Post-Scriptum"{2000 年}の二枚組。発売当時、二枚ともにタムボリンのベストセラー。2002 作)

[CD/ＳＰＡＩＮ]

*MIGUEL PUJADO:Canta Georges Brassens B
(マドリードのフォーク・シンガーの Miguel Pujado の 1992 年のアルバム。本作はフランスを代表する反体制的シャンソン歌手ジョルジュ・ブラッサンスの唄 17 曲をギターの弾き語りを中心にうたったアルバム。ブラッサンスはギターの弾き語りでうたうことにこだわったという。軽快な曲調のギターの伴奏と巻き舌の語り口調の唄がフォーク・ソングとしてのシャンソンの味わいをにじませている。1992 作。Saga)

[CD/ＧＡＬＩＣＩＡ]

*CHOUTEIRA:Folla De Lata B
（ガリシアの歌姫 Uxia をヴォーカルに据えた異色のガリシアン･トラッド･バンドの Chouteira の 2000 年の三枚目。面白いのは、ガイタやパンデレイタやアコなどの馴染みの楽器に加えて、サックスやチューバやトランペットなどの管楽器が加わっていて、イングランドなら Brass Monkey のような音作りを加えていること。このサウンドは、ケルティックなガリシアン･トラッドに耳慣れたファンには目新しく響くが、ある意味むしろ南欧～地中海の民俗音楽的な響きでもあって、むしろ土俗性を増しているようにも感じられる。Uxia の孤高のシンギングも絶品。2000 作。Boa）
*NA LUA:As Fases De Na Lua B
（ガリシアを代表する歌姫 Uxia を擁したガリシアを代表するトラッド＆フォーク･ロック･バンド"Na Rua"の 20 周年記念アルバム。既発表音源からの全 18 曲。ガリシア独特なケルティック･サウンドは、今聴いても鮮烈。2001 作。Boa））
*UXIA:Estou Vivindo No Ceo（1995 作。Nubenegra） C
*EMILIO CAO:Cantas Marinas（1998 作。Do Fol） D

[CD/ＩＴＡＬＹ]

*ROSAPAEDA:In Forma Di Rosa B
（南イタリアの歌姫 Rosapaeda の 2001 年のアルバム。彼女のアラブ＝地中海風味香るヴォーカルと敏腕演奏家達による汎南イタリア～汎地中海音楽的にスケールの大きな民俗色豊かな音楽。2001 作。Sottosuono）
*N.C.C.P.:Teatrante A
（副題"Con Le Piu BelleCanzoni"。ライヴ音源２曲を含む全 11 曲。2001 作。Warner Europe）
*ANGELO BRANDUARDI:Gulliver,La Luna E Alti Disegni C
（開封。1992 作。EMI）

[CD/ＳＡＲＤＩＮＩＡ]

*ELENA LEDDA:Làntias B
（サルディーニャの歌姫の Elena Ledda の 15 枚目。80 年代に出逢って、サルディーニャの伝統音楽に根ざした地中海の香りを含んだ彼女のエキゾティックでエレガントな音楽の虜になってしまったが、あれから 30 年あまり経っても、サルディーニャの伝統音楽に根ざした彼女の地中海風味のエキゾティックでエレガントなシンギングと音楽は不変。例えば Loreena McKennitt のような夢想的なムードが漂っていて、ある種桃源郷のような境地にも感じられる音楽だ。2017 作。Sard）

[CD/ＰＯＬＡＮＤ]

*WARSAW VILLAGE BAND:Sun Celebration D
（Warsaw Village Band の七枚目に当たる新作は二枚組。三人の歌

姫をフロントに立てた彼らのヨーロッパと東アジアの範囲で国境を越えた独自のワールド･ミュージックは､本作でさらに勢いを増していて､感動的｡土俗的な歌姫達の唄は汎大陸的な大地の響きだし､民族楽器を駆使した音楽は様々な民俗性がミックスされいて呪術的で妖艶｡ゲスト:Mercedes Peón,Ustad Liaquat Ali Khan,Sanjay Khan,Amrat Hussain｡2017 作｡Jaro)

[CD/KLEZMER,GYPSY,BALKAN 他]

*MARA ARANDA:Sefarad C
(副題"Sefarad en el corazón de Marruecos"｡スペインはヴァレンシア生まれのアラブ＝地中海の民俗色濃厚な音楽を志向し､人々の魂を揺さぶる民謡をうたう Mara の本作は､モロッコのスペイン系ユダヤ人の唄に焦点を当てた渾身のアルバム｡バンドが創作する中世スペインのアラブ音楽はエキゾティックで気高く､民俗性豊かで､魅惑的で､ゆるくメリスマの効いた Mara のヴォーカルは､最高に魅惑的で幻夢的｡P60 のブックレット{スペイン語と英語}付｡2017 作｡sgae)

*REINETTE L'ORANAISE
:Tresors De La Chanson Judeo-Arabe(1986 作｡Melodie) C

*RENE PEREZ
:Tresors De La Chanson Judeo-Arabe(発売年不明｡Melodie)C

*RAOUL JOURNO
:Tresors De La Chanson Judeo-Arabe(発売年不明｡Melodie)C

*ALEXANDER FEDORIOUK:The Art Of The Cimbalom A
(2003 作｡Traditional Crossroads)

*DEN FLYGANDE BOKRULLEN:Shuff! B
(スウェーデンの６人編成のクレズマー･バンドの３枚目｡｢クレズマーのパンク･ロッカー｣と言われる彼等のクレズマーは､ホーン３台とサックス＆クラリネット{同じ奏者}が１台の４台の吹奏楽器が炸裂するまるでバルカン･ビート･バンドのような祝祭ムード満点なクレズマ｡世界で最もハッピーなｸクレズマー･バンドかも｡2007 作｡Arko)

*OLD SALT:Up River Overseas A
(Old Salt は米国人一名､スコットランド人一名､ベルギー人三名､スウェーデン人一名で二姫四太郎の六人組｡核になる音楽は米国人シンガーでバンジョーとフィドル担当の Dan Wall の音楽性､それはアパラチアン音楽とオールドタイム･ミュージック｡Dan Wall 自身がその系統のシンガーとして､ミュージシャンとして秀でた才能の持ち主で､他国の音楽仲間の手を借りて､その系統の音楽の最前線のハイブリッドな音楽を創作していて､お見事｡ヨーロッパの古風なジプシー音楽のサウンドもご披露｡2016 作｡Appel)

[CD/ＧＵＩＮＥＡ]

*DJELI MOUSSA CONDE:Womama A
(グリオでコラ奏者でシンガーの Djeli Moussa Condéの二枚目｡本作はネルソン･マンデラに捧げられたアルバム｡アフリカ音楽か

らラテン音楽までの幅で、カラフルでトロピカルでジャンプ力あるワールド・ミュージック。2015 作。Buda Musique)
*MORY KANTE:Sabou A
(西アフリカのコラ奏者の第一人者。本作はグリオの伝統音楽に帰ったもので、コラとバラフォンを要にした多彩なリズムと Mory と女性シンガーが掛け合う唄はすこぶる快感。ヴォーカルをを含め様々なサウンドが踊るように響き合う。2004 作。Riverboat)

[CD/ＣＯＬＯＭＢＩＡ]
*TROPICAL SOUNDS OF COLOMBIA A
(クンビアやサルサなど多様なコロンビアの音楽。20 曲収録編集盤。1990 作。Mango)
*LA SONORA DINAMITA:Cumbia Explosion A
(コロンビアのクンビア・バンドの大御所による 16 曲。1990 作。Mango)
---
*すべて聴き終わって、今回困るくらい女性シンガー大豊作の内容になったと、改めて思っています。SSW/フォーク・シンガーとして新境地を邁進する Karine Polwart、今が絶頂期！？の Maria Muldaur、ルーツ回帰の Eliza Gilkyson、ブラックホーク回帰！？の Helen Diamond などなどなどなどの女性達の唄に元気をいっぱいもらいました。数少ない男性シンガーはと言うと、Richard Thompson も Donnie Fritts も Bob Fox も別格でした。
*去年の暮れにお友達取引をしていた Red House から「会社たたむ」の知らせをもらって、John Gorka の新譜が最後のリリースかと思いきや、Eliza Gilkyson の新譜が Red House からリリース。お友達取引をしている Compass からの配給で、担当者がまじめで仕事が早く、良い会社の傘下に入ってくれたと喜んでいます。
*fROOTS のレビューで、フィンランドのヴェテラン・トラッド・シンガーの Sanna Kurki-Suonio がヴォーカルの Andrew Cronshaw 率いる Sans の新作を知って、直接 Andrew に発注。およそ 30 年前にカウスティネン・フォークフェスに行ったときに、行くとこ行くとこで Andrew を見かけたよ、とメールすると、"I remember you being at Kaustinen with Phillip"と、ぼくのことも覚えてくれていました。続けて「Sanna Kurki-Suonio の大ファン」とメールすると、一分も経たないうちに「You have excellent taste! :-)」と。
*ついでながら、Phillip というのは後にヴァルティナのマネージャーになった Phillip Page 氏。Phillip 氏はタムボリンが阿蘇にあった頃にわざわざ遊びにも来たことがあります。季節は冬。寝るとき寝室のストーブを消したら「どうして消すの？凍死するよ！」と。「消してもフトンに入ったら温かいから心配しなくて良いよ」と説得。朝ご機嫌良い目覚めでした。懐かしい思い出。
*近所にある塚原小学校の生徒さんからの希望で、娘の(生山)早弥香が自宅でアイリッシュハープ教室を始めて、今年で 11 周年。10 周年はスケジュール的にも気持ち的にも余裕がなく、無視したのですが、早弥香が「11 月 11 日に湯布院教室 11 周年記念発表会」の案を

思い立ち、「それいいねぇ」と即決定しました。当日はいつもの発表会＆お茶会に加えてミニコンサートも予定していて、楽しい 11 周年発表会になるのではと楽しみにしているところです。最初の生徒さん３人は今は専門学校生や大学生。もう一人は社会人かな？時の経つのは速い。
*皆さん、それぞれの「音楽の秋」をお過し下さい。では、注文をお待ちしています。（船津）

